

2015.3.6

「ゾンビ経済学を倒せ！」

こんにちは、参議院議員の西田昌司です。本日は3月6日の金曜日です。

先月から財政再建に関する特命委員会が始まりました。ビデオレターでもお伝えした通りです。今までに5回行い、次回からは委員同士のブレインストーミングも始まります。

私はその議論をずっと聞いて来ました。また、色々な先生方も来られましたが、やはり私が一番肝心なことは、デフレから脱却するために、成長によって経済を大きくし、それによって財政を再建することです。安倍総理が目指しておられますのはそういったことであり、それは非常に大事なことです。

しかし、問題は何故日本がデフレになったのかということです。デフレになった原因をはっきり掴んでおかないと、デフレからの脱却やGDPを上げると言っても、原因追求がおろそかになってしまうと、単なる財政縮減になってしまいます。

私が本日皆様方にお話させて頂くのは、トマ・ピケティの21世紀の資本という本についてです。この本が今大変売れているとのこと

で私も読みました。非常に分厚い本です。一言で言いますと、 $R > G$ ということなのです。これは、利益率・利子率が成長よりも大きいということを示しています。財産を持っておられる方々に入ってくる収入の方が経済成長で入ってくる収入よりも大きくなるということです。それはつまり、企業で大儲けした株なのか、それともヨーロッパ的に相続でどんどん溜まってきたお金である等の色々な理由がありますが、結局富は大金持ちの方々に集中してしまい、社会は大きな貧富の格差が出て不安定になってしまうことが書かれています。

過去2・300年間の西洋、アメリカ、日本も含めた歴史を見てみると、第1次大戦があった1914年から第2次大戦があった1945年とそれが終わってから1970年代ぐらいが奇跡的に非常に安定した時代でした。2つの戦争によって社会資本が壊れ、大金持ちの財産が無くなり、結果的に貧富の差が無くなって、その間は非常に安定した経済成長が出来たことがこの本では書かれています。ですから、もう一度貧富の差を無くす様な事をしなければならないということがピケティの話でした。

そこで、ピケティの本を読んでいた時に気づいたことは、皆様方もわかりますように、ピケティの主張とは、新自由主義的な格差が

あったとしても、トリクルダウンですべて解決できることを真っ向から否定する話であることです。私もその通りだと思います。

そのピケティの本の中で言っていたことがありました。それは、オーストラリアとニュージーランドの2つの国は同じような地理的な環境と経済状況にあって、20世紀には同じように経済成長もしました。ところが、1980年代に2つの国は袂を別つ大きな違いをもたらすことになりました。それはいわゆる構造改革です。日本でも郵政民営化が言われていましたが、郵政の民営化とか構造改革をする時に何時も小泉総理が例として出されたのが実はニュージーランドなのです。ニュージーランドでは小泉さんが見本とするぐらいの過激な改革をしました。もう片方のオーストラリアでは穏健な形での改革しかしませんでした。

そして30年後どうなったかといいますと、2つの国が同じようなGDPだったのが、一人当たりの所得を見ると、ニュージーランドはオーストラリアの3分の2程度でしかなくなってしまいました。ニュージーランドは目も当てられない様な悲惨な状況になってしまった事が書かれておりました。

以上のようなことを言っていた人が、ジョン・クイギンというゾ

ゾンビ経済学という本を書かれた人です。ジョン・クイギンはオーストラリアのクイーンズランド大学で経済学を教えておられる先生です。私もこの本を読みました。これもぶ厚い本ですがさっきの本の半分ぐらいの大きさです。ぜひこちらも御覧になって頂けると良いと思います。

このゾンビ経済学という本に書かれていることは、1970年代から1980年ぐらいまでは世界的にも経済が安定していたが、それは戦争が終わった後、ケインズ経済学が世界中を指導してきたからだということなのです。

しかし、1970年代後半から1980年代になってケインズ経済学は事実上死んでしまいました。そして、代わりに出てきたのがフリードマン率いる新自由主義です。このように変化した理由は1970年代後半あたりから、インフレがどんどん大きくなり、給料もどんどん上がると経済成長がしにくくなりました。物価が上がって給料も上がりますが、程度を超えてしまうと、経済成長しなくなり、物価は上がるけれども経済成長しないというスタグフレーションになってしまいました。そこで行き詰ってきたのです。

そのような財政出動はやり過ぎなので、もっと小さな政府で、公

的な部門へのお金を出すのではなく、民間にお金を回して自由にやらせるべきだ、選択の自由だという話で始まったミルトンの唱えた新自由主義経済が次々と 1980 年台から発展してきました。

その経済学は一見正しく思えましたが、最後は 2007 年のリーマン・ショックの破綻によって全世界が恐慌に巻き込まれてしまったのです。この状況で、かつての 1929 年の大恐慌のように政府がなにもせず放っておいたらもっと酷いことになりましたが、幸いなことに、日本を始め世界中の国がケインズ型の経済を行った結果、大破綻は免れましたが、大バブルの破綻があったのです。

その原因をこの本では 1 つ 1 つ説明していますが、ゾンビと書いているように、本当はそこでもう理屈的にも実質的にも終わったはずの経済学が今なお終わらずに生きています。死に損ないの経済学をゾンビ経済学とクイギンは呼んでいますが、それがなぜ未だに死に損ないになっているかというその根の深さをいろんな形で実証的に説明しながら説いているのがこの本です。この本を読んでいくと、私が前々から思っていたことと同感する所がたくさんありました。

そして、ここをしっかりと理解しておかないと、あの日本の停滞が何であったのかという意味が分からなくなります。

デフレになった原因は、ゾンビ経済学の中でも唱えているように、正に新自由主義的な経済政策を行って、資本はどんどん海外に持って行かれて雇用も持って行かれました。国内でその配当は回っても雇用には回らない上に、肝心の政府の支出によって雇用を守るべきだったはずが構造改革だと称して、国も地方もどんどん雇用をやめてしまいました。それではデフレになるのは当然です。

私はこのことを今痛切に感じています。だからこそ、この財政再建の特命委員会でも、私がデフレの原因が何だったのかということで新自由主義政策の誤りをしっかりと指摘し、誤りを認めた上で今度は財政出動が必要であることを言わねばならないと私は思っています。

是非皆様にもこの本を読んで、広めて頂きたいと思います。

本日は久々のビデオレターですが、私がこれからの自民党内の議論で言おうとしていることを皆様方に先にお話させて頂きました。財政再建の委員会につきましてはまたお話をさせて頂きたいと思えます。

本日もご覧頂きありがとうございました。